
英雄ストーリー

冬空 白雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄ストーリー

【Nコード】

N9164X

【作者名】

冬空 白雪

【あらすじ】

世界は異能者と通常者に別れていた。異能専門の学校に通う月葉燐音は鍵を見つけ、扉を開けるために生きていた。

ケンカは痛い（前書き）

前に載せていたものを少し変えて、また載せました。

ケンカは痛い

寝癖で髪がピンと外側に跳ねている男は、朝食に食パンと目玉焼きを食べながら、液晶型テレビでニュース番組を観ていた。それは朝のすっきりとした気持ちを汚す。テレビから胸糞悪いニュースを読むアナウンサーの声が耳に伝わってきた。

『昨夜、一人の男性の遺体が発見されました。男性は黒焦げになっており、身元の究明を急いでいます。自殺と殺人の両方で捜査をしていくとのこと。続いては芸能ニュースです——』

「朝から嫌な気分だ……」

低脂肪牛乳を飲みほして立ち上がり、リモコンでテレビの電源を消す。寝癖を直すために洗面台に向かい、水で髪を濡らしてタオルで拭き、最後はドライヤーで乾かす。寝癖を直してからハンガーに掛けていた制服を手にとって着る。準備を終えて、靴を履いて玄関の扉を開けて家を出る。

微風が髪を揺らす。鍵を閉めて学校に向かった。

男が住んでいる所は実家ではなく、校の寮だ。実家からだ学校に通うのに自転車で8時間も掛る。実家の近くにも学校はあるのだが、男、月葉燐音は異能者のため通常者が通っている普通の学校には通えない。

世界は、異能者と通常者に別れていた。

異能者は、ここ何十年で急に生まれ出した。原因は何なのか未だに解明されていない。一説によると、異能の研究していた組織が事故で破壊し、それが何らかの影響を及ぼしている。とか、隕石が落ちてきた時に、何かしらの成分が一緒に飛来してきた。など、説は噂の数だけある。

異能者は通常者と比べ物にならないくらい強い力を持っている。制御ができず力を暴走させないように、犯罪に力を使わせないために、小さい頃から道徳や力の訓練が義務付けられている。普通の訓

練校は異能者が力を制御できるように教えるだけで、あとは普通の学校と変わらない。もちろん先生も生徒も異能者で構成されている。しかし隣音が通っている所は特殊な学校で、育てる訓練学校だ。

異能者が罪を犯した時に対処する『護者』になるための訓練学校。ここを卒業しても護者でない道もある。力をうまく使い、仕事に役立たせる者もいる。

異能者が罪を犯す時がある。その時は通常の警察では相手にならない。異能者には異能者をぶつけなければならない。そこで護者が必要になる。

異能者が生まれたことで国が危険と判断し、すぐに罪を犯した異能者を取り締まる対異能者組織が創られた。それが、護者だ。

護者の使命は、

1、異能を使用して人を殺してしまった者、犯罪を行った者を捕まえる。

2、異能者が拉致された場合、解決に向けて動く。

3、力が暴走した者を抑える。

といった業務がある。

「おーい、隣音待ってくれ！俺も一緒に行くからさ」

アスファルトの歩道を歩いていると後ろから隣音を呼ぶ声がハッキリと聞こえてきた。その声を隣音はよく知っていた。同じ寮に住んでいる隣音の友達、夏海夜涼介だ。

足を止めて振り返ると、数十メートル先に黒い制服に身を纏った京介が腰に二本の剣を携えて、息を切らせながら走ってきていた。

「はあはあ、マジで疲れた。こいつ重すぎなんだよ」

剣に手で触れて隣音に見せてくる。

京介もちろん異能者だ。物体を操ることができる能力を有している。生物は操れないが、物なら大概操る。例えば、この剣を手に持たずに動かすことができる。ちなみに隣音は風を創りだす能力だ。

空気がある所なら風を起こすことができ、竜巻なども簡単に創りだせる。

「一本ならまだしも二本も持ってるんだから、そろそうだろ。それに学校に余裕で間に合うんだ、歩いてこればいいだろ」

「そんなこと言うなよ。友達なんだし、仲良く一緒に行こうぜ」

京介はへらへら笑いながら言う。京介は燐音の左側の位置についた。

夏の暑い中、男二人一緒に歩き出す。

歩いていると男子ならしたことがあるであろう、自然に芸能人で誰が可愛いかという話になっていた。

「俺は、葉心奈ちゃん可愛いと思ってる。おっぱい大きいし、お尻も小さい、スタイル最高だ。それにあの顔だぜ」

京介はゼスチャーをしながら興奮して言った。

「何言ってるんだ！？ 千草泉のほうが可愛いに決まってるだろ。キラキラ輝いているパッチリ二重は最高だぞ。お前、かわいそうな奴だな」

燐音は京介と意見が合わず、イラつときていた。

「ああ！？ 燐音のセンスこそ大丈夫か？」

「正常だよ！ 京介のセンスこそ疑うわ！！」
どちらも譲らない。

燐音は、自分が可愛いと思っている芸能人が一番可愛いと絶対的に信じているからだそして京介もそれは同じだ。

こうして、朝から醜い争いを繰り広げながら学校に向かった。が、学校に着いてもまだそれは終わっていなかった。二人は校門で言い争っている。

「葉心奈は性格悪いだろ。何であんな奴が好きになれんだよ」

「はあ！？ 千草泉なんて絶対ビッチだろ。清純派で売ってるともりだろうが、体から滲み出てんだよ」

「なんだと！」 燐音が睨む。

「なんだよ！」 京介が睨み返す。

両者とも我慢の限界が来ていた。最初はただの世間話だったはずが、いつしかケンカに発展していた。

「いい加減に認めろよ……京介！」

「隣音こそ……今なら許してやるぞ」

お互いに服を掴み合った。今にも殴り合いになりそうな雰囲気をしている。

そこに、一人の女子が現れた。どこまでも吸い込まれそうな黒色の瞳をした、茶髪のロングヘアの彼女はビーフジャーキーを咥えながら二人に歩み寄っていく。

「こらこらにやにしてんの？ 朝から暑苦しいにもほどがあるよ。周り見てみな、引いてる」

他の生徒は二人のケンカに引いていた。だが、そんなことはお構い無しだった、声を掛けられた二人は同時に言った。

「ああ！？ 関係ねえよ。俺達は負けられない戦いをしてるんだ。

外野は黙ってろ！」

「恵玲奈には関係ない話だ。引っ込んでろ！」

二人は興奮していて口調が強いにが、それを気にせず薪山恵玲奈は二人に訊いた。

「負けられない戦いって……。何が原因でケンカしてんのよ？」

理由を訊かれた二人は、どっちが悪いか決めてもらおうと思って原因を話した。

「芸能人で誰が可愛いかって話になって、俺が好きな葉心奈ちゃんを隣音がバカにするんだよ。信じられないだろ？」

「京介のセンス最悪だろ？ 千草泉ちゃんのほうが可愛いのに葉心奈のほうが可愛いとかほざいてるんだぜ」

あまりにもふざけたことを言っているの、恵玲奈は理解するのに少し時間がかかった。二人とも真剣な顔でケンカしていたので何事かと思ってみれば、どうでもいいことこの上ないことでケンカをしていることが解った。

「なにそれ、呆れるんですけど……。結論はどっちでもいいしって

話ですよ。ただ、みんなに迷惑だから、ケンカはやめなよ。ね？」

恵玲奈のどうでもいいという言葉聞いて二人は切れた。

「はっ、所詮ビーフジャーキーを食べてる女なんかには、これがどんなに大事なことが解らないんだな。時間の無駄だったただけだな」

「そうだな、京介。こいつには解らないんだよ。ビーフジャーキーなんかを食べてる女だからな」

二人の言葉を聞いて恵玲奈は黙っていられなかった。

「ねえ、今何て言った？ 二人ともビーフジャーキーをバカにしたでしょ。今、ビーフジャーキーをバカにしたでしょ！！」

ケンカを止めさせようとしていた薪山恵玲奈は、ビーフジャーキーをバカにされて怒り心頭。実は彼女の好きな食べ物はビーフジャーキーなのだ。好きなモノもバカにされることは人間にとって屈辱を受けたのも同然のことだ。

「だからなんだよ。引っ込んでろ」

「こっちは忙しいんだ」

「ビーフジャーキーをバカにされて引っ込めるわけないでしょ！

あんた達謝ってよ！」

人差し指を二人に指す。二人は彼女の人差し指を掴み、二人同時に言った。

「謝るわけがないだろ！」

「誰が謝るか！」

「そうなの……なら、力づくでも謝ってもらうから覚悟しなさいよね！」

三人とも血管が浮き出ている。恵玲奈はケンカを止めることなどどうでも良くなってしまった。頭には謝らせることだけだ。

「話が早いな。これで負けた者が勝った者に謝るんだな」

燐音は不敵に笑っている。

校門付近から移動して運動場にやってきた。ここは広くて、力を使っても迷惑にはならない。三人は離れて三角形の形になり、体勢を整える。燐音は屈伸をし、京介は上半身を捻って、恵玲奈は腕を

上に伸ばしている。

「燐音！ お前を斬る！」

「京介！ 吹っ飛ばしてやるよ！」

燐音と京介が向かい合う。

「なに無視してくれちゃってるのよ！ 今、謝るんだったら二人とも火傷程度で済ませてあげるわよ」

一人無視されている恵玲奈。

風が吹いてどこかにある缶が転がった音を合図に戦いは始まった。京介が左手を横から前に突き出して動かすと、京介の後ろから鉄のパイプが燐音を目掛けて飛んでいった。反応が遅れて風で防ごうにも時間が足りず、ギリギリしゃがんで燐音は避けた。そのモーシヨンの間にも剣を片手で持って京介は燐音に向かって駆け出している。燐音は体制を立て直し、風の刃で京介を斬りつける。

「三日月」

しかし、風の刃は京介に届く前に京介の能力で操った誰かの自転車ですでに防がれ弾かれた。

「クソ」

京介は、燐音を斬りかかった。燐音は後ろに跳び引いたが、それでも剣は左腕をかすった程度に切り裂いた。剣先が赤く輝く。

「痛っ」

斬られた燐音はすかさず京介の懐に入り、右手を腹に当てて風を生みだし回転させ、吹き飛ばす。

「ぐああああ」

京介は吹き飛び、地面に叩きつけられた。

追撃しようとした燐音は炎の壁に阻まれてしまい、動きを止められた。

恵玲奈の仕業だ。空気がある所なら炎を生みだせ、操る力。

「私を……無視するな。火傷じゃ済ませないんだからね。炎雨！」

赤い雨が放たれる。いくつもの炎が上からではなく、水平から避けることができないほどの数が迫りくる。が、燐音には関係なかった。

た。

「風車」

手を突き出し生み出された風で炎雨を上空に吹き飛ばす。炎の粒は上空の空気に冷やされ、消える。直後に、遠くから京介の声が聞こえてきた。

「お返しだ！　喰らいやがれ」

車が走ってくるようなスピードで今度は車を飛ばしてきた。

「くそ、避けられない」

炎雨を吹き飛ばした直後だったため、風を生みだして防ぐことも出来ず、避け切れることもできず、そのまま燐音は車に轢かれるように校舎の壁まで吹っ飛ばされた。どうにか手をバツに重ねて重傷は避けたが、手と背中中に激痛が走る。どうやら片方の手には骨にひびが入ってしまったようだ。

「京介も覚悟しなさいよ。炎龍喰らいなさい」

手から放たれた炎は龍の形をして襲いかかる。京介は避けようとはせずに、燐音に飛ばした車を引きよせて盾にする、と同時にもう一つカーブミラーをエレナにぶつける。車は爆発し、重症は避けることができた。しかし、飛び火が制服に燃え移ってしまった。

「熱い、燃える、燃える。水……水ないじゃん。やべえ、消えろ、消えろ」

近くに水がないため、手で火を消そうとする。それでもいけないので京介は寝転がりコロコロ回って火を消している。

恵玲奈は炎龍を出して体力が持たなかったのか、避けることができず、カーブミラーは直撃した。

「きゃあ、痛っ。額に傷つくじゃない」

三人共それぞれが傷を負っている。

「痛えな。車に轢かれたようなもんだぞ。覚悟はできてるんだろうな」

「熱いだろ！　やっと消せたぞ。覚悟しとけよ」

「額に切り傷できたらどうしてくれるのよ。覚悟しなさい、あんた

達」

それぞれ力を溜めて技を出そうとしている。が、それを何者かに阻止された。植物の枝が身体を締め付けられて動くことができない。

「な、なんだこれ？ ……動けない」

「きゃあ、なによこれ」

「邪魔すんな。今、いいとこなんだよ……動け」

動こうとすると余計に締め付けられる。

「何がじゃないぞ、お前達！ 生徒同士で異能の力を使ってケンカするのは禁止にされているはずだ！ それに、もう授業時間だぞ！ いい加減にしろ！」

ケンカの邪魔をしたのは学校の先生で三人のクラス担任だった。

植林守雅先生、植物の力を使う異能者だ。手を地面につけて植物を生みだすことができ、操る力。

三人は頭を下げることでできないので目を真っ直ぐ見て気持ちを込めて謝る。

「よし、お前達は医療班に診てもらって身体を治してこい。治ったら、ここの運動場を綺麗に掃除しろ！ いいな？」

許しを得た三人はワザが解けて、身体が解放された。

その後、植林先生の言う通りに医療の力を持っている異能者『癒し人』の人たちに診てもらい、傷を治すことに。京介と恵玲奈は軽い怪我で済んだので治療の時間は短かった。隣音は重い傷を負っていたので時間が掛った。全部の授業が潰れてしまった。

保健室を出て、掃除をしに運動場に戻る。

「それにしても掃除か。億劫だな」

「特に京介が使った車は爆発して部品飛び散ったから大変」

「ごめん」

戦いの惨事を見て後悔した。地面の砂は禿げて、ゴミは散らばり過ぎている。

掃除をしていると冷静になったのか、どうでもいいことで怒ってしまったことを京介から謝りだした。

「ビーフジャーキーバカにして、ごめんな。燐音もごめん。あんなことで怒ってさ」

「いや、俺のほうこそ悪かったよ。恵玲奈もすまん、ビーフジャーキーをバカにして。うまいのは知ってたんだけど、つい……な。悪かった」

「ううん、いいの。私こそビーフジャーキー如きで怒って子供だよね。まだまだだった」

ケンカするほど仲が良いというのが異能者がケンカをしたら、ケンカレベルでは済まないと分かった。

「ところで、この車誰の持ち主は誰なんだ？ 俺知らないけど」

燐音が訊く。

「爆発させて悪いことしちゃった」

「誰かしらないけどごめんなさい」

京介は重たい部品を浮かせて、恵玲奈は軽い部品を持ち、元の場合に戻しに行った。燐音は風で小さいゴミを片付けた。

掃除が終わり、授業を受けることなく帰る。今日は三人の絆がより深まった一日になったようだった。

三人が家に帰宅して、家で寛いでいる頃――。一人の教師が仕事を終えて家に帰ろうと車がある駐車場に向かったが、朝にはあった車がない。変わりにあったものは無残に変わり果てた部品の姿だった。

「わしは何したって言うんじゃ。まだローン残っているのに……。

誰だ！ わしの車をこんなことにしよったのわ。誰だ……」

言葉がいくにつれて涙が溢れ出し、その教師は嗚咽が止まらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9164x/>

英雄ストーリー

2011年10月25日17時01分発行